往復書簡：第13号掲載論文をめぐって

巻末「编辑杂感」でも触れた通り、当会報13号が掲載した伊禮智香子氏の論文「林白の作品にみられる女性形象」に対し、読者である白水紀子氏から質問文が寄せられました。今期編輯委員会は、執筆者に質問を伝えるとともに、白水氏の提起した問題を会報の編輯、或いは論文の執筆や閲読の在り方に対して投じられた一石と捉え、その扱いについて検討を重ねてきました。最終的に、今回の経緯を限定的であれ会として共有することを趣旨として、伊禮氏からの回答を含め、ここに双方の承諾を得て掲載するものです。

［伊禮智香子氏への当該論文に関する質問］

当該論文は林白の作品に現れる自己愛の描写の中に、「男性性を拒否（あるいは排除）する」「男性とのセックスに苦痛を感じている」「男性社会にあって同化できず、精一杯その浸食から身を守っている」女性像を読み、そこに女性性の解放と男性的価値体系に対する抵抗をみる、という枠組みで書かれたものだと理解しました。とすれば、当該論文を成立させる条件として、自体愛を行う女性たちが一、「男性性を拒否（あるいは排除）している」二、「男性とのセックスに苦痛を感じている」ことを証明する根拠（具体的な描写箇所の指摘）が必要になるとおもわれますが、私が林白文集全四巻を読んだ限りでは、該当個所がみつかりませんでした。そこで、あらためて、以下の質問させていただきます。

質問①：当該論文50頁、1）～4）で具体的に紹介される自己愛が「男性性を拒否」するものであることを読み取るには、具体的に何頁のどの箇所をよめばいいのでしょうか。

ちなみに1）は文集1―ｐ.132～133、2）は文集3―ｐ.282、3）は文集2―ｐ.5、4）は文集1―ｐ.330からの引用だと思われます。それぞれの文脈について私の読みは省略しますが、たとえば、3）は主人公が八歳の時の行為ですので、事例としては大人になった時の自体愛の描写を引用するほうがいいと思います。

ここでは、4）について少し感想を述べさせてください。

当該論文50頁4）に引用されている自体愛の描写は、北諾が自分の体を武器にして、目的を達成するために男のところに出かけて行く前の行為です。この部分の直前には（文集1―477頁1行～5行目）つぎのように書かれています。つまり、北諾が離婚してしばらく男性との性交渉がなかったこと、それゆえむしろ相手の男との間でこれから発生するであろう出

来事に興奮すら覚えていること、「これは性の取引ではなく、彼女の生理上の需要であり、それはお腹がすいたらご飯を食べるのと同じ、たとえご飯がまずくても、食べられるのだから」と自分に語りかけ、それから自体愛に移っています。これらの描写からは、むしろこの女性の異性にたいする強烈な性欲が読み取れ、少なくとも、男性性を排除したり拒否している女性だとよむことは到底できません。これらをどう解釈すればいいのでしょうか。

［1）から3）についても同様に、すくなくとも男性を積極的に拒否したり否定する女性のようには読めませんでした］

質問②：「男性とのセックスに苦痛を感じている」女性の例が、当該論文50頁最後の行から52頁かけて紹介されていますが、これらはともに、女性のほうから積極的に自分を商品として男性に売り出した時に得た感覚です。当該論文51頁4行目の「致命的飛翔」の引用（文集1―ｐ.335）は、その一回目の交渉の時に、時間がないからと一方的にセックスされた時のもの、同51頁最後3行からの引用は三回目の交渉の時にレイプまがいのことをされた時の描写です。こういう場合のセックスに女性が苦痛を感じるのは自然のことではないでしょうか。本論の趣旨に沿う「男性とのセックスに苦痛を感じている」事例としては不適切ですので、ごく「普通」の状況でおこなわれる性交渉の場面にすべきでしょう。では何頁のどの箇所をみれば「男性と快楽を共有できず、生理的苦痛のみを感じている女たち」が描かれているのでしょうか。私はみつけることができませんでしたので、具体的にご教示ください。なお、「致命的飛翔」において、北諾が二回目の時に、相手の男からやさしく愛撫されて快感を味わっている描写がありますが、これはどう解釈したらいいのでしょうか。

質問③：当該論文は林白の作品を時間軸で見た場合、94,5年ころから自己愛に戻ることによって、女性たちが「自殺の道」から「再生」の道を歩き出すようになると述べられています。しかしながら、その論証として当該論文53頁から54頁にかけて引用される「一個人的戦争」の部分は、すでに「同心愛者不能分手」（87年）（文集1―ｐ.153）にも全く同じ箇所があります。この「同心愛者不能分手」では、上記引用部分のあと、吉という女性はまもなく自殺しています。同じ描写部分でありながら、「一個人的戦争」だけを「再生」の方向に向かう変化の証拠としてあげるのは適切でしょうか。あるいは、それでもこの部分をそう読むというのであれば、何らかの説得ある説明が不可欠だと思います。

質問④：当該論文54頁2）で紹介されている「守望空心歳月」について：当作品の該当部分の話は、確かに「精神病院を退院してくると、女は人前に現れることはごく少なくなる」までは書かれていますが、話はそれで終わっています。それなのに何を根拠に「つまり強

力な自己の内に引きこもることで、女の再生がはかられるのである」といえるのでしょうか。どこを読めばそういう結論が導きだせるのか、具体的に該当個所をご教示ください。

以上です。私の誤解、誤読による失礼な質問も含まれているかも知れませんが、その場合にはどうかご容赦ください。

白水 紀子

1999年11月30日

［白水紀子氏の拙論『林白の作品にみられる女性形象』に対する質問に答えて］

（一部省略）

質問①

→50頁の1）～4）の引用箇所は自己愛の強い女性形象を鏡に向かう女たちの描写から紹介しました。ここでは4）のように「自体愛」に及ぶ描写も提示し、今後論を展開するにあたって、私が考える自己愛の強い女性形象を示すことが主眼であり、「男性を拒否する」こととの関連は次の「3 受容されない男性――女の側の生理的苦痛、拒絶」以降で展開したつもりです。ですからこの質問は質問②でお答えしたいと思います。ただ、引用箇所に対する疑問についてはここでお答えします。

3）の引用箇所の件ですが、8歳の頃のことでしょうか。確かに引用箇所のすぐ後で「八岁的时候自己发现左边的乳房有硬块，妈说去找北京医疗队看」で8歳の頃の話になりますが、冒頭の語りから考えると（「那种对自己的凝视很早就开始了」で始まる文章は、現在の視点から、語り手が幼い頃のことを回想しています。そして例えば、私が引用した文のすぐ前、文集2の5ページ3行目～5行目で「这种做法一直延续下来，直到如今」とあるように、全体を見通す視点から話が始まり、過去に遡って回想部分があり、また、現在の視点にかえるのではないかと思われます。それが混在して私にはよくわかりかねるところもあるのですが）、私が引用した箇所は、現在の「私」が自分の思考を語っているのであり、8歳の頃に限定したものではないのではないでしょうか。少なくとも私はそう読み、引用として使いました。しかし、もしも8歳の頃のことであるのならば、ご指摘のように事例として不適切だと思います。

質問②及び4）の引用箇所に関するご感想について

→4）については『致命的飛翔』に関するご感想ですので、質問②と併せてお答えします。まずご感想の部分からいきますと、私には北諾が異性に対する「強烈な性欲」をもつとは

思えません。彼女は「想到她姣好的肉体将要再次在一个异性面前展开」することで「甚至有些激动」するのであり、そのあとの描写にもあるように、ベッドでの自分自身の魅惑的な肢体に思いを巡らせているだけで、相手に対する欲望描写はありません。相手に対しては、二回目に男を訪れる前に「她将那具苍老而笨拙的躯体，那具缺乏激情的躯体之下，滋生着屈辱和仇恨」（347頁）とあり、彼女は取引をしに行く道々、自分の身体に意識を集中することで嫌な思いを克服しようとします。また最後に男と会う前、呼び出しの電話を受けてもしばらく呆然としてしまい、化粧を始めてもなかなかはかどらず「不应该为这个男人化妆」とあります。その時の鏡に映る彼女の顔は死人の如く、着ている真っ赤なセーターはその後の惨劇を予感させるものです。確かに、男の愛撫を受けて快楽を得ている描写（348頁）もあるのですが、それは「他十分地照顾着女人的感觉需要」だからであり、彼女自身が自分の身体を愛撫するのと同じ類の快楽です。結局その時、男は勃起できないわけですが、男が彼女との性交渉を成立させる場面は、どれも彼女を満足させるものではありませんし、苦痛を与えるものでしかありません。

次に質問②の性交渉の描写の取り上げ方に対する疑問に焦点を当てて、お答えしたいと思います。

実はこうした疑問（「男性とのセックスに苦痛を感じている」事例として取り上げるべきはレイプまがいの場面ではなく、「普通」の状況下での性交渉であるべきである）が生じるとは思いもよらないことでした。私は男性とのセックス（拙論では性行為と「セックス」を同意語で用いています）が苦痛であるという問題設定をしていて、それは「普通」かどうかの状況に拘わらず、苦痛だということだからです。極端に言えば、「普通」に男性とセックスをする場面はないのではないかとさえ思われます。ですからそういうことから言うと「では何頁のどの箇所をみれば」と疑問を投げかけられるのはもっともなことであるわけです。この件に関しては、正直言って虚を衝かれた感じでいます。論文を書く上で、手続きに妥当性を欠いているのであれば反省しなければならないと思っています。

質問③

→ご指摘のように、同じモチーフが両方に使われています。7年を隔てて全く同じ描写が使われるわけです。今回私自身はそのモチーフが違う結果を引き出していることが問題ではないかと思いました。「致命的飛翔」に「女人对爱情的最彻底的报答就是：我嫁给你」という言葉があります。すぐには思い出せませんが、ほかの小説にも似たような言い方があったと思います。つまり、「一个人的战争意味着一个女人嫁给自己」ということは、女が男ではなく、自分自身を選ぶことであり、それは破滅を孕むものでもあるわけで、「同心愛者不能分手」の女は自分を選んだ結果自殺し、「一個人的戦争」の女の方は生きていく。私は

その引き出された結果を発展的だと捉えるわけですが、自殺かそうでないかというだけで、同じモチーフによるものを、自殺から再生へと発展的に考えるのは安易ではないか、説得力に欠けるのではないかといわれると言葉がありません。同じモチーフをどう解釈するかについてはゆくゆくは考えなければならないと思っています。お気づきかと思いますが、林白の他の作品にも同じ描写や人物が重複して出てきます。それについて、拙論でも引用した金燕玉氏は「往往一个画面会出現在几个不同的作品中」と指摘した上で重複した叙述は弊害だと警告していますが、なぜそうした叙述になるのかを考察し、同じ叙述をどう扱うか判断しなければならないと考えています。今回はそこを不問に付して引き出される結果から書いてしまいました。

質問④

→「守望空心歳月」で女が精神病院から退院後、強力な自己の内に引きこもることで再生をはかるという解釈の根拠は何かということについて。

艾影は自意識が強く、自分を文化的素養に富みかつ性的魅力に溢れた文句のつけようのない現代女性だとみなし、夫が自分以外に女を作るはずはないと思いこんでいますが、予期せぬ夫の情事場面に遭遇したことで発狂してしまいます。その後、彼女は回復すると、夫へ自分から離婚を提出し、人前に現れることを避けるようになるわけですが、それは彼女が外界と自分を切り離すことで、自分を立て直そうとしているのだと読むのが妥当だと思いますし、そのあとで、神秘さを増したという表現がありますので、彼女が自分の殻にこもることである程度の自意識の回復をみたとは読めないでしょうか。勿論、作品にはその後について書かれていないので、説得力に欠けると言われればそうですが、私はやはりこれまでの女性形象と異なり、艾影が発狂しても回復するというところに意味を見いだします。

＊＊最後に

今回の拙論は、短い枚数の内に林白の作品を幾つも列挙して論じた関係で、根拠が希薄で、独りよがりな論になったところがあったことは否めません。ご意見をいただいたことで改めて考えたこともあり、大変有難く思いました。ご質問に対して、きちんと向き合った答えになっているでしょうか。本来なら、再度論文にして、私の林白論を展開しなければならないところですが、いかんせんすぐにとはまいりません。とりあえず、お答えだけさせていただきます。今後ともご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。

伊禮智香子

2000年３月９日